



五 秋は夕暮れ（杜の都の巻 上）

季節は秋となった。京都の至る所では、赤や黄色の自然の錦が飾られた。また、その色づいた錦の中を、その数を上回るほどの観光客たちの黒や茶、白い頭などがその中を回遊していく。その錦は、山から街へと、盆地を水で満たすように京都の街全体に広がっていく。そうした秋の夕暮れのある日。

「おーい。こっち、こっち」

「すみません。順番ですから」

「さっきから、呼んでいるんだけど」

「すぐに別の者が来ます」

静寂な雰囲気の中だが、色づく葉の下では、その雰囲気を壊すかのように、鑑賞者たちが、紅葉そっちのけで、紅葉狩りならぬ、抹茶と和菓子の争奪戦を繰り広げていた。その時、鑑賞者の、いや、飲食者の一人の抹茶の器に紅葉の葉が一枚、はらりと落ちた。

「あら、洒落ているじゃない」

御婦人は、器から紅葉の葉を取り出さずに、そのまま、抹茶を一口飲んだ。その隣の、配偶者らしき男の器にも、紅葉の葉が一枚、ひらりと落ちた。

「ほら。俺にもだ」

抹茶とお菓子がなかなか運ばれてこないのも、じっと座っていられず、再び、散策していた夫がふらりと戻って来て、紅葉の葉が浮かんでいる茶器を妻に見せた。

「あら、いいじゃない」

「これが、お茶じゃなく、お酒だったらもっと最高なんだけどなあ」

夫は、もうお酒を飲んでいるかのように顔をへらりとさせた。

「何、言っているの。まだ少し早いんじゃない。それに、昨日も、晩酌したじゃない」

「昨日は、昨日。今日は、今日だ」

夫は茶器に口を付けた。その時、叫んだ。

「何だ、これは？」

夫の唇には、牛が糞を食べているように、紅葉の葉が数枚啜えられていた。

「あら、いやだ。いくら、お酒が飲みたいからと言って、紅葉の葉まで食べなくてもいいのに。紅葉の葉っぱを食べても、顔は赤くならないわよ」

妻が口に手を当てて、ほらりと笑った。その口にも、紅葉の葉が。

「うぐ。ぺっ」

妻は口に飛び込んできた、紅葉の葉を吐き出した。

「お前も俺と一緒にじゃないか。でも、紅葉の葉っぱなら、いくら食べても太らないかな」

夫は妻のでっぷりと突き出た腹を見て笑う。

「それは、あなたも一緒でしょう」

妻も夫の腹を手でぐいと掴むと、壁に投げつけられたボールが手元に戻ってくるように、すぐに言い返した。相手のアラを見つけても、自分の欠点は見て見ぬふりをする、これが、長年、苦勞を共にした夫婦の真の姿である。

「それよりも、これは一体どうしたことだ」

夫が茶器を見ると、そこには抹茶の緑色は見え、紅葉の赤い葉が漬物にするぐらいに積み重なっていた。それは、自分だけじゃない。妻の茶器も同様に、紅葉の葉で山盛りになっていた。

辺りを見回す。周りのお客さんたちも、口から紅葉の葉を吐き出している。中には、入れ歯ごと口から出して、葉を取り除いている人もいる。それだけじゃなかった。どこからか大量の紅葉が雪崩のように降ってきた。

「た、たすけて！」

助けの声も空しく、雪に閉ざされ地域の家々や車のように、お客さんたちは紅葉の雪に埋もれてしまった。

その頃、火レンジャーは、境内を始め、道など、お寺の周辺の紅葉の葉を掃き清めていた。そして、再び、境内に戻ってくると、さっき掃き清めたはずの庭が紅葉の葉で山盛りになっているのを見て驚いた。

「さっき、履いてきれいにしていたはずなのに、誰が、こんなところに紅葉の葉を捨てたんだ。確か、この辺りは、観覧者たちに抹茶やお菓子を出す休みどころだったはずだが……」

火レンジャーが紅葉の山を再び、箒で掃こうと近づいたところ、その葉の隙間から人間の手が見えた。まさか、死体か？だが、修行を積んだ火レンジャーは、そんなことでは動じない。何事もないかのように、藁をも掴むように突き出した手に、自分の本物の手を差し出した。

「どうして、紅葉の山の中に入っているんだ。紅葉のかまくらごっこか」

と、手を引っ張る。すると、紅葉の山から葉が崩れてザザザと音がすると、高齢者の男性が紅に染めた髪の毛とキツネが化ける時に葉を啜えたかのように現れた。

「困るなあ。こんなところで遊ばれたら。ここは、紅葉を観賞する場所で、かくれんぼで遊ぶ所じゃないですよ。いくら、還暦を過ぎると童心に戻ると言っても戻りすぎですよ」と、火レンジャーが老人を戒める。

「あ、遊んでなんかいない。急に紅葉が降ってきて、埋もれてしまったんじゃ。すぐ側に、妻も埋まっているし、ここでお茶を楽しんでいた他のお客さんも埋もれているはずだ」

老人の真剣な声を聞いて、火レンジャーは老人の言葉は冗談ではなく、本当のことを言っていると信じた。これは、ただ事ではない。

「そうだ。事件は現場で起こっているんだ。よし」

と、気合を入れると、火レンジャーは、手探りで、紅葉の山で鹿を追い求めるように、かき分け、分けかきして、埋もれた人々を次々と助け出した。

「もう、誰も、紅葉の山の中に残っていませんか。見つからない人がいたら、おっしやって

ください」

紅葉の山に埋もれて、呼吸困難に陥っている人々はぜえぜえと息を吐きながらも、互いに顔を見回して、首を横に振った。

「それなら」

火レンジャーは、口から炎を吐いた。紅葉の山は、一瞬で紅葉以上に赤く染まり、やがて灰となった。

「これは、一体、どうなっているんだ」

火レンジャーが灰となった葉っぱを見つめていると

「よくも邪魔したな」とのなじるような声がした。そして、再び、紅葉の葉が空から、火レンジャーや観光客たちにどしゃぶりの雪のように降ってきた。

「みんな、逃げろ。ここは私が防ぐ」

火レンジャーは嵐のように吹いてくる紅葉の葉に向って、先ほどと同様に、口から火を放った。紅葉の葉は、一瞬、くしゅんと項垂れるようにして、勢いを落とすと、空中で燃えて消えた。

だが、紅葉の葉は一枚、二枚ではない。数千枚、数万枚もの数で、しかも、途切れることなく、火レンジャーに向ってくる。火レンジャーも負けまいと、口から火を放つ。紅葉は燃え消えた。しかし、大群のように、これまでか、これまでかと執念深く襲い掛かってくる紅葉の葉の放水は、次第に、火レンジャーの顔の前まで近づいてきた。そして、とうとう、火レンジャーの口の中にまで紅葉の大群が流れ込んだ。

「うぐ」

口から紅葉を吐き出す火レンジャー。燃やされなくなった紅葉の葉が火レンジャーの体に容赦なく積もっていく。その葉が、あっという間に、紅葉の山となってしまった。たかが一枚の葉であれば軽くて、跳ね飛ばせるものの、その数が何十万、何百万枚にもなると、雪の結晶と同様、その重みで動けなくなるのだ。まるで、葉の海に溺れたかのようなようだった。

「どうだ。動けまい」

火レンジャーが埋もれた山の横では、白装束の大きな城の形をした化け物が立っていた。